

# 夏の町

永井荷風

青空文庫



枇杷びわの実は熟して百合ゆりの花は既に散り、昼も蚊の鳴く植込うえいごみの  
 蔭かげには、七度ななたびも色を変えるといふ盛りあじさいの長い紫陽花あじさいの花さえ早  
 や萎しおれてしまった。梅雨つゆが過ぎて盆芝居ぼんしばいの興行も千秋楽せんしゅうらくに  
 近づくと誰も彼も避暑ひしょくに行く。郷里へ帰る。そして炎暑あかるの明あかるい寂せ  
 寞きぼくが都会を占領する。

しかし自分は子供の時から、毎年まいねんの七、八月をば大概何処どこへ  
 も旅行せずに東京で費してしまふのが例であつた。第一の理由は  
 東京に生れた自分の身には何処へも行くべき郷里がないからであ

る。第二には、両親は逗子ずしとか箱根はこねとかへ家うちじゆう中のものを連れて行くけれど、自分はその頃から文学とか音楽とかとにかく中学生の身としては監督者の眼を忍ばねばならぬ不正の娯楽ふけに耽りた必要から、留守番という体ていのいい名義もとみずかの下に自ら辞退して夏三つぎ月をば両親の眼から遠ざかる事を無上の幸福としていたからである。

たしか中学を卒業する前の年の事かと記憶する。どういう訳か逗子へ半月ばかり行っていた時の事を半紙にじよう二帖にじようほどに書いたものが、今だに自分の手篋てばこの底に保存されてある。成島柳なるしまりゆう北ほくがあいだ仮名交りの文体をそのままに模倣したり剽ひようせつ窃せつしたりした間あいだ々あいだに漢詩の七言絶句しちごんを挿さしはさみ、自叙体の主人公をば遊子ゆうしとか小

史とか名付けて、薄倖多病の才人が都門の栄華を外にして海辺  
 の茅屋ぼうおくに松風しょうふうを聴くという仮設的哀愁の生活をば、いかに  
 も稚氣ちぎを帯びた調子でかつ厭味いやみらしく飾つて書いてある。全篇の  
 題は紅蓼こうり白蘋ようはくひん録ろくというので挿入した絶句の中には、

已見秋風上白蘋。

すで〔已に見る秋風 白蘋はくひんに上り〕

青衫又汚馬蹄塵。

せいさん青衫又た馬蹄ばていの塵ちりに汚る

月明今夜消魂客。

月明るく 今夜 消魂しょうこんの客

昨日紅樓爛醉人。

さくじつ昨日は紅樓こうろうに爛醉らんすいするの人

年来多病感前因。

ねんらい年来 多病たびょうにして前因ぜんいんを感じ

旧恨纏綿夢不真。

きゅうこん旧恨 纏綿てんめんとして夢真ゆめまことならず

今夜水楼先得月。

今夜 すいろう 水楼 ま 先ず月を得て

清光偏照善愁人。

清光 せいこう 偏 ひと 偏えに照らす はなはうれ 善だ愁う

の人」

なぞというのがあった。今日 こんにち 読返して見ると覚えず ふんぼん 噴飯するほ

どである。わずか十四、五歳の少年が「昨日は紅楼に爛醉するの  
人」といつているに至つては、文字上の遊戯もまた驚くべきでは  
ないか。しかし自分は近頃十九世紀の最も正直なる告白の詩人だ  
といわれたポオル・ヴェルレエヌの詳伝を読み、

Les 《ソ》 sanglots 《サングロ》 longs 《ロン》

Des 《ソ》 violons 《ブオロン》

De 《ド》 l'automne 《ロオトオヌ》……

「秋の胡弓こぎゆうの長き咽むせび泣なき」という彼の有名なLa《ラ》chans  
 on 《シヤンソン》 d'automne 《ドオートオヌ》（秋の歌）の一篇の  
 如きはヴェルレエヌが高踏派こうとうはいの詩人として最も幸福なる時代の  
 作で、その時分には妻もあり友達もあり一定の職業もあつた事を  
 伝記の著者から教えられた。して見ると、「過ぎし日の事思おも出い  
 でて泣く、「といたりあるいは末節の、「われは此処ここ彼処かしこにさ  
 まよう落葉おちば」といったのはやはり詩人の Jeux d'esprit（心の遊戯）  
 であつたのだ。しかし自分は無論おの己れを一世の大詩人に比して弁  
 解しようというのではない。唯晩年ただには Sagesse 《サッジエス》  
 の如き懺悔ざんげの詩を書いた人にも或時はかかる事実があつたもの  
 かと不思議に感じた事を語るに過ぎぬのである。

私は毎年まいねんの暑中休暇を東京に送り馴れたその頃の事を回想して今に愉快でならぬのは七月八月のふたつき両月を大川端の水練場すいれんばに送った事である。

自分は今日になつても大川の流のどの辺へんが最も浅くどの辺が最も深く、そして上汐あげしお下汐ひきしおの潮流がどの辺において最も急激であるかを、もし質問する人でもあつたら一々明細に説明する事のあるのは皆当時の経験の賜物たまものである。

午後ひるすぎ後に夕立を降ふらして去つた雷鳴の名残が遠く幽かすかに聞えて、真白な大きな雲の峰の一面が夕日の反映に染められたまま見渡す水す神いじんの森もりの彼方かなたに浮んでいてというような時分、試こころみに吾妻橋あずまばしの欄干たたずに佇立たつたみ上汐さからに逆さかつて河を下りて来る舟を見よ。舟は大概右

岸の浅草に沿うてその艫ろを操っているであろう。これは浅草あさくさの岸一帯が浅瀬になつていて上汐の流が幾分か緩ゆるやかであるからだ。しかし中洲なかずの河沿いの二階からでも下を見下みおろしたなら大概の下り船は反対にこの度は左側なる深川ふかがわ本所ほんじよの岸に近く動いて行く。それは大川おおかわぐち口から真面まともに日本橋区にほんばしくの岸へと吹き付けて来る風を避けようがため、されば水死人しかばねの屍しが風と夕汐ゆうしおとに流れ寄るのはきまつて中洲の方の岸である。

自分が水泳を習い覚えたのは神伝流しんでんりゆうの稽古場けいこばである。神伝流の稽古場は毎年本所ほんじよ御舟蔵おふなぐらの岸に近い浮洲うきすの上に建てられる。浮洲には一面蘆あしが茂つていて汐の引いた時には雨の日なぞにも本所辺へんの貧まずしい女たちが蜆しじみを取りに出て来たものであるが今では

石垣を築いた埋立地になってしまったので、浜町河岸には今以て昔のように毎年水練場が出来ながら、わが神伝流の小屋のみは他所たしよに取払われ、浮洲に茂った蘆の葉は二度と見られぬものとなつた。

ひととおり

一 通遊泳術の免許を取つてしまつた後は全く教師の監督を

離れるので、朝早く自分たちは蘆のかけなる稽古場に衣服を脱ぎ捨て肌襦袢はだじゆばんのような短い水着一枚になつて大川筋をば汐の流にまかまか任して上流かみは向島むこうじま下流は佃しものあたりまで泳いで行き、疲れると石垣の上に這上はいあがつて犬のように川端を歩き廻る。

濡れた水着のままよく真砂座まさござの立見たちみをした事があつた。永えいた代の橋の上で巡査とがに咎められた結果、散々さんざんに悪口あっこうをついて

捕つかえられるなら捕つかえて見ろといいいながら四、五人一度に橋の欄干から真逆まっさかさま様になつて水中へ飛込み、暫くして四、五間も先きの水面にぽっくり浮うかみ出して、一同わアいと囃はやし立てた事なぞもあつた。

泳ぐ事もできず裸はだか体で川端かわぼたを横行する事も出来ぬ時節になつても、自分はやはり川好きの友達と一緒に中学校の教場以外の大抵な時間をば舟遊びに費した。

われわれは無論ボオトも漕こいだ。しかしボオトは少くとも四、五人の人数にんずを要する上に、一度かい櫂を揃えて漕出せば、疲れたからとて一人勝手に止やめる訳には行かないので、横おうちやく着で我儘わがままな

連中れんじゆうは、ずっと気楽で旧式な荷足舟にたりぶねの方を選んだ。その時分にはボオトの事をバツテラという人も多かつた。浅草橋あさくさばしの野の田屋だやや築地つきじの丁字屋ちようじやから借舟かりぶねをするにしても、バツテラと荷足とは一日の借賃かりちんに非常な相違があつた。

土曜といわず日曜といわず学校の帰り掛けに書物の包を抱えたまま舟へ飛乗つてしまうのでわれわれは蔵前くらまえの水門すいもん、本所のひやっぼんぐい、代地だいちの料理屋の棧橋さんばし、橋場の別荘の石垣、あるい百本杭ひゃっぼんぐい、代地だいちの料理屋の棧橋さんばし、橋場の別荘の石垣、あるいはまた小松島こまつしま、鐘ヶ淵かねふち、綾瀬川あやせがわなどの蘆の茂りの蔭に舟をつないで、代数や幾何学の宿題を考えた事もあつた。同時にまた、教科書まの間に隠した『梅暦うめごよみ』や小三金五郎こさんきんごろうの叙景文をば目まの当りあたに見る川筋の実景に对照させて喜んだ事も度々であつた。

かかる少年時代の感化によつて、自分は一生涯たとえ如何なる激しい新思想の襲来を受けても、恐らく江戸文学を離れて隅田川すみだがなる自然の風景に対する事は出来ないであらう。

鐘ヶ淵の紡績会社や帝国大学の艇庫は自分がまだ隅田川を知らない以前から出来ていたものである。それらの新しい勢力は事実において日に日に土手や畠や河岸かわぎしや蘆の茂りを取払つて行きつつあるが、しかし何らの感化をも自分の心の上には及ぼさなかつたのだ。黒煙こくえんを吐く煉瓦づくりの製造場せいぞうばよりも人情本の文章の方が面白く美しく、乃ち遙すなわに強い印象を与えたがためであらう。十年十五年と過ぎた今日こんにちになつても、自分は一度ひとたび竹屋橋場たけやはしばい今戸まどの如き地名の発音を耳にしてさえ、忽然こつぜんとして現在を離れ、

自分の生れた時代よりも更に遠い時代へと思いを馳はするのである。いかに自然主義がその理テオリイ論を強しいたにしても、自分だけには現在あるがままに隅田川を見よという事は不可能である。

自然主義時代の仏蘭西文学フランスは自分にはかえって隅田川に対する空想を豊富ならしめた傾かたむきがある。

モオパッサンはその短篇中に描いたセエヌ河の舟遊そぞろびによつて、漫そぞろにわれわれの過ぎ去つた学生時代を意味深く回想させ、ゴンクウル兄弟がEn 18…の篇中に書いた月夜げつやムウドンの麗うるわしい叙景は、蘆みぎやなぎと水みぎやなぎ楊あやせの多い綾瀬あたりの風景をよろこぶ自分に対して更に新しく織せんこう巧こうなる芸術的感受性を洗練せしめた。ゾラは『田園

(Aux champs)』と題する興味ある小品によつて、近頃の巴里パリ人が都会の直ぐ外なるセエヌ河畔の風景を愛するようになった。その来歴を委しく語つて、偶然にも自分をして巴里人と江戸の人の風流を比較せしめた。

ゾラの所論によると昔の巴里人は郊外の風景に対して今日の巴里人が日曜日といえれば必ず遊びに出掛るような熱心な興味を感じてはいなかつた。その証拠は時代風俗の反映たるべき文学を見て、十七、八世紀の文学上には一ツとして今日の抒情詩人が歌つているような「自然」に対する感想を窺う事は出来ない。ルツソ才出でて始めて思想は一変し、シャトオブリアンやラマルチンやユウゴオらの感激によつて自然は始めて人間に近付けられた。最

初希ギリシヤ臘ヤ芸術によつて、〔divinise〕 《デヴィニゼエ》（神らしく）された自然、仏蘭西古典文学によつて度外視された自然は、ロマンチズムの熱情によつて始めて〔humanise〕 《ユウマニゼエ》（人間らしく）せられた。しかしユウゴオやラマルチンはまだ一度もバリ郊外の自然をそが抒情詩の直接の題材にして歌つた事はない。それはかの通俗小説の作家として今では最もう忘れられようとしている Paul 《ポオル》 de 《ド》 Kock 《コック》 を以て嚆こうし矢みなと見做さなければならぬ。ポオル・ド・コックは何も郊外の風景その物を写生する目的ではないが、今から五、六十年前 Louis 《ルイ》-Philippe 《フィリップ》 王政時代の巴里の市民が狭苦しい都会の城壁を越えて郊外の森陰を散歩し青あおくさ草の上で食事を

する態をば滑稽なる誇張の筆致を以てその小説中に描いたのである。その時代から一般の風俗は次第に變つて来てポオル・ド・コックの後には画家の一団体が盛に巴里郊外の勝地を跋渉し始めた。今日では誰も知っている彼の Meudon 《ムウドン》の佳景を発見したのは自然を写生するために古典クラシックの形式を破棄した  
 [Franc,ais] 《フランセイ》一派の画工である。それからずつと上流の Mantes 《マント》までを探ったのは Daubigny 《ドオビニイ》である。今まではその地名さえも知られなかったセエヌの河畔は忽ちの間に散歩の人の雑沓ざつとうを来すようになった、最初の発見者 Daubigny 《ドオビニイ》はどうとうセエヌ河の本流を見捨て Oise 《オアズ》の支流を溯つて Anvers 《アンヴェール》

の遠方へ逃げ込み、Corot 《コロオ》はやつと水溜りや大木の多い、Ville 《ヴィル》 d'Avray 《ダヴレエ》に踏み留るようになつた。

この記事からひるがえつ翻むこうじまて向島と江戸文学との関係を見ると、江戸の人は時代からいえば巴里人よりもつと早くから郊外の佳景に心附いていたのだ。俳諧師の群はむれ瓢ひょうたん箏しょうを下こうとうげて江東の梅花に「やや稍と、のふ春の景色」を探つて歩き、蔵くらまえ前の旦那衆は屋根舟に芸者と美酒とを載せて、「ほんに田舎もまじばた焚はしばいまとく橋場今戸」の河景色を眺めて喜んだ。

最初河水の汎かすい濫はんらんを防ぐために築いた向島の土手に、桜花おうかの裝飾を施す事を忘れなかつた江戸人の度量は、都会を電信柱の大森

林たらしめた明治人の経営に比して何たる相違であろう。

巴里の人たちは今でも日曜日には家族を引連れて郊外の青草あおくさの上で葡萄酒を飲む。しかしわれわれの新しき時代は絵のような美しい伝統を破棄するの急務に追われているばかりである。

この二、三日方々から頻しきりに絵葉書が来る。谷川を前にした温泉宿や松の生えた海辺うみべの写真が来る。友達は皆例の如く避暑に出かけたのだ。しかし自分はまだ何処へも行こうという心持にはならない。

縁えん先の萩はぎが長く延びて、柔かそうな葉おもての面に朝露が水晶の玉つづを綴つづっている。石榴ざくろの花と百日紅ひやくじつこうとは燃えるような強い色彩ひるすぎを午後ひるすぎの炎天かがやかに輝し、眠むような薄色の合歓ねむの花はぼやけた紅べに

の刷毛はけをば植込みうえこみの蔭なる夕方の微風そよかぜにゆすぶっている。単調な蝉の歌。とぎれとぎれの風鈴ふうりんの音——自分はまだ何処へも行くとういう心持にはならずにいる。

## 二

モオパッサンの短篇小説 [Les Soe&urs Rondoli] (ロンドリ姉まい妹)の初めに旅行の不愉快な事が書いてある。

「……転地ほど無益なものはない。汽車で明す夜といえば動揺する睡眠に身体からだも頭も散々さんざんな目に逢う。動いて行く箱の中で腰の痛さに目が覚める。皮膚が垢あかだらけになったような

気がする。いろいろな塵ごみが髪と眼の中へ飛込む。すうすう風の這入はいつて来る食堂車でまずい食事をする。それらは私にいわせると旅行と称する娯樂の嫌悪けんおすべき序じよびらき開である。まずこの急行列車の序開があつた後あとには旅館ホテルの淋しき。人が一ぱいいながら如何いかにもがらんとした広い旅館。見も知らぬ気味悪い部屋、怪あやしげ気な寢床の淋しさが続いて来る。私には何がさて置き自分の寢床ほど大切なものはない。寢床は人生の神聖なる殿堂である。人は生活を赤裸々にして羽毛蒲団はねぶとんの暖さと敷布しきふの真白ましろきが中に疲れたる肉を活気付けまた安息させねばならぬ。

恋愛と睡眠の時間。われわれが生存の最も楽しい時間を知る

のは寢床である。寢床は神聖だ。地上の最も楽しく最も好いものとして敬い尊び愛さねばならぬものだ。

それ故私は旅館の寢床の毛布を引捲る時にはいつも嫌悪の情に身を顫わす。ここで昨夜は誰れが何をした。どんな不潔

な忌わしい奴がこの蒲団マトラの上に寝たであろう。私は人がよく

後指うしろゆびさして厭いやがる醜い偃偻や疥癬搔ひつつかきや、その手の真黒

な事から足や身体中はさぞかしと推量されるように諸有あらゆる汚

い人間、または面と向うと蒜にらや汗の鼻持ちならぬ悪臭を吹き

かける人たちの事を想像するし、不具者や伝染病や病人の寝

汗や、人間の身体の汚いという汚いもの、醜いという醜いも

のを想像する。

自分が寝ようとする寝床にはそういう醜いものが寝たかも知れぬ、と思うと、私は其処そこへ片足を踏入れるのが何ともいいようのないほど厭である。」

これは無論西洋の旅館の話だ。日本の旅館にはそれに優まさるとも敢あえて劣らぬ同じ蒲団の気味悪さに、便所とそれから毎朝顔を洗う流し場の不潔が景物として附加えられてある。

便所の事はいうまい。もしこれが自分の家うちであつたら、見知らぬ人に寝起ねおきのままの乱れた髪や汚れた顔を見せずとも済むものを、宿屋に泊る是非なさは、皺だらけになつた寝衣ねまきに細いシゴキを締めたままで、こそこそと共同の顔洗い場へ行かねばならない。

洗あらい場ばの流は乾く間のない水のために青苔あおごけが生えて、触つた

らぬらぬらしそうに輝ひかっている。そして其処には使捨てた草楊くさよう枝じの折れたのに、青いのや鼠色の啖たん唾つばが流れきらずに引掛ひつている。腐りかけた板いたばめの上には蛞蝓なめくじの匍はた跡あとがついている。何処どこからともなく便所の臭気におが漲みなぎる。

衛生おもんを重おもずるため、出来る限りかかる不潔を避けようためには  
県知事様でもお泊りになるべきその土地最上等の旅館ホテルへ上あつて大  
に茶代を奮発せねばならぬ。単に茶代の奮発だけで済む事なら大  
した苦痛ではないが、一度び奮発すると、そのお礼としてはいざ  
汽車へ乗つて帰ろうという間際きまなぞに極きまつて要いりもせぬ見掛みかけばかり  
大きな土産物みやげものをば、まさか見る前で捨てられもせず、帰りの  
道中の荷厄介しよこまにと背負こまい込こませられる。日本の旅館の不快なる事は

毎朝毎晩番頭や内儀ないぎの挨拶、散歩の度々に女中の送迎、旅の寂しさを愛するものにとつてはこれ以上の煩累はんるいはあるまい。

何処へ行くかと思案うちしている中、土用半どようなかばには

早くも秋風が立ち初そめる。蚊遣かやりの烟けむりになお更薄さら暗く思われる有ありあ

明けの灯影ほかげに、打水うちみずの乾かぬ小庭を眺め、隣の二階の三味線を

簾越すだれごしに聴く心持……東京という町の生活を最も美しくさせる

ものは夏であろう。一帯に熱帯風な日本の生活が、最も活いきいき々と

して心持よく、決して他人種の生活に見られぬ特徴を示すのは夏

の夕ゆうべだと自分は信じている。

虫籠むしご、絵団扇えうちわ、蚊帳かや、青簾あおすだれ、風鈴ふうりん、葭簀よしず、燈籠とうろう、盆景ぼんけい

のような洒々しやしやたる器物や装飾品が何処の国に見られよう。平素

は余りに単白たんぱくで色彩の乏しきに苦しむ白木造りの家屋や居室全体も、かえつてそのために一種いうべからざる明い軽い快感を起させる。この周囲と一致して日本の女の最も刺※的に見える瞬間もやはり夏の夕、伊達巻だてまきの細帯にあらう浴衣ゆかたの立膝たてひざして湯上りの薄化粧する夏の夕ゆうべを除いて他にはあるまい。

町まちじゆう中の堀割に沿うて夏の夕を歩む時、自分は黙阿弥翁もくあみの書いた『島衛月白浪しまちどりつきしらなみ』に雁金かりがねに結びし蚊帳もきのふけふ——と清元きよもとの出語でがたりがある妾宅の場を見るような三味線的情調に酔う事がしばしばある。

観潮楼かんちようろうの先生もかつて『染めちがえ』と題する短篇小説に、西鶴のような文章で浴衣と柳橋やなぎばしの女の恋を書かれた事があつ

た。それをば しょうじきしょうだゆう 正直正太夫 という当時の批評家が得意の Cal  
 embour を用いて「先生の染めちがえは染ちがえなり。」と罵つのし  
 た事をも私は明治小説史上の逸話として面白く記憶している。

いつぞや（二十三、四の頃であつた）柳橋やなぎばしの裏路地の二階  
 に真夏の日盛りを過した事があつた。その時分知つていたこの家や  
 の女を誘つて何処か涼しい処へ遊びに行くつもりで立寄つたので  
 あるが、窓外まじそとの物干台ものほしだいへ照付ける日の光の眩まぶしさに辟易へきえきして、  
 とにかく夕風の立つまでとそのまま引止められてしまったのだ。  
 物干には音羽屋格子おとわやこうしや水玉や麻の葉つなぎなど、昔からなる流行はやり  
 の浴衣が新形しんがたと相交つて幾枚となく川風に翻っている。其処そこか

ら窓の方へ下る踏板の上には花の萎れた朝顔や石菖やその他の植木鉢が、硝子の金魚鉢と共に置かれてある。八畳ほどの座敷はすっかり渋紙が敷いてあつて、押入のない一方の壁には立派な箆笥が順序よく引手のカンを并べ、路地の方へ向いた表の窓際には四、五台の化粧鏡が据えられてあつた。折々吹く風がバタリと窓の簾を動すと、その間から狭い路地を隔てて向側の家の同じような二階の櫺子窓が見える。

鏡台の数だけ女も四、五人ほど、いずれも浴衣に細帯したままごろごろ寝転んでいた。暑い暑いといいながら二人三人と猫の子のようにくつつき合つて、一人でおとなしく黙っているものに戯いかける。揚句の果に誰かが「髪へ触っちゃ厭だつていうのに。」

と癩癩かんしゃくごえ声を張り上げるが口喧嘩くげんかにならぬ先に窓下まどしたを通る蜜みつま

豆屋めやの呼び声よびこゑに紛まぎらされて、一人が立つて慌あわただしく呼止める、

一人が柱にもたれて爪弾つまびきの三味線さんまいせんに他の一人を呼びかけて、

「おやどうするんだつけ。二から這入るんだツけね。」と訊きく。

坐るかと思うと寝転ぶ。寝転ぶかと思うと立つ。其処こゝには舟ふなぞ

底枕こまくらがひっくり返っている。其処こゝには貸本の小説かいたのせつや稽古本けいこぼん

が投出なげだしてある。寵愛ちゆうあいの小猫こねこが鈴すずを鳴しながら梯子段はしごだんを上あがつて

来るので、皆みんなが落ちていた誰かの赤いしごきを振ふつて戯じゃらす。

自分は唯黙ただもくつて皆みんなのなす様さまを見ていた。浴衣一枚ゆいまいの事で、いろ

いろの艶なまめかしい身の投げ態なげさまをした若い女たちの身体の線しなが如何にも

柔なく豊とよかに見えるのが、自分をして丁度ていど、宮殿みやでんの敷しきがわら瓦わらの上に

集う土耳其美人の群を描いたオリヤンタリストの油絵に対するよ  
うな、あるいはまた歌麿の浮世絵から味うような甘い優しい情  
趣に酔わせるからであつた。

自分は左右の窓一面に輝くすさまじい日の光、物干台に翻る浴  
衣の白さの間に、寝転んで下から見上げると、いかにも高くいか  
にも能く澄んだ真夏の真昼の青空の色をも、今だに忘れず記憶し  
ている……

これもやはりそういう真夏の日盛り、自分は倉造りの運送問屋  
のつづいた堀留あたりを親父橋の方へと、商家の軒下の僅か  
なる日陰を択って歩いて行つた時、あたりの景色と調和して立去

るに忍びないほど心持よく、倉の間から聞える長唄ながうたの三味線に聞取れた事がある。

歌は若い娘の声、絃いとは高音たかねを入れた連奏つれびきである。この音楽があつたために倉続きの横町の景色が生きて来たものか、あるいは横町の景色が自分の空想を刺※していたために長唄がかくも心持よく聞かれたのか、今ではいずれとも断言する事はできない。真正の音楽狂はワグネルの音楽をばオペラの舞台的装置を取除いて聴く事をかえつて喜ぶ。しかしそれとは全然性質を異にする三味線はいわば極めて原始的な単純なもので、決して楽器の音色ねいろからのみでは純然たる音楽的幻想を起させる力を持っていない。それ故日本の音楽にはいつも周囲の情景がその音楽的効果の上に欠く

べからざる必要を生ぜしめるのはやむをえぬ事であろう。

その日は照り続いた八月の日盛りの事で、限りもなく晴渡った青空の藍色は滴り落つるが如くに濃く、乾いて汚れた倉の屋根の上に高く広がっていた。横町は真直なようでも不規則に迂曲うねつていて、片側に続いた倉庫の戸口からは何れも裏手の棧橋さんばしから下る堀割の水の面が丁度洞穴ほらあなの中から外を覗いたように、暗い倉の中を透してギラギラ輝ひかつて見える。荒布あらぬのの前掛を締めた荷揚の人足が水に臨んだ倉の戸口に蹲踞しゃがんで涼んでいると、往おうら来いぎわ際には荷車の馬が鬘たてがみを垂して眼を細くし、蠅の群れを追払う元気もないようにじつとしている。運送屋の広い間口の店先には帳場格子ちようばこうしと金庫の間に若い者が算盤そろばんを弾はじいていたが人の出入

りは更に見えない。鼠色した鳩が二、三羽高慢らしく胸を突出して炎天の屋根を歩いていると、荷馬にうまの口へ結びつけた秣まぐさ桶おけから麦むぎ殻からのこぼれ落ちるのを何処から迷つて来たのか瘦せた鶏ひとどが一、二羽、馬の脚の間をば恐る恐る歩きながら啄ついばんでいた。人ひと通おりは全くない。空気は乾ゆるいて緩やかに涼しく動いている。

自分はいつも忙しかるべきこの横町の思いもかけぬ夜のような寂せき寞ぼくと沈滞たちつづとに、新しい強い興味に誘われながら歩いて来た時、立たち続つづく倉の屋根に遮さへぎられて見えない奥の方から勢よく長唄うちの三味線の響ういて来るのを聞いたのである。炎天あかるの明あい寂せき寞ぼくの中うちに二挺ちようの三味線は実によくその撥ばち音おとを響うかした。

自分は「長唄」という三味線の心持をばこの瞬間ほどよく味い

得た事はないような気がした。長唄の趣味は いつちゆう 一中 きよもと 清元などに含まれていない江戸氣質の他の一面を現したものである。拍子はいくら早く手はいくら細くても真直で単調で、極めて執着に乏しく情緒の粘つて纏綿てんめんたる処が少い。しかしその軽快鮮明なる事は俗曲と称する日本近代の音楽中この長唄に越すものはあるまい。

端唄はうたが現す恋の苦労や浮世のあじきなさも、または浄瑠璃が歌う義理人情のわずらわしさをもまだ経験しない幸福な富裕な町家ちやうの娘、我儘で勝気でしかも優しい町家の娘の姿をば自分は長唄の三味線の音ねにつれてありありと空想中に描き出した。そして八月の炎天にもかかわらず、わが空想のその乙女おとめは襟附えりつきの黄きはち

八丈じょうに赤いひつたしほり 匹田絞ひつたしほりの帯を締めているのであった。

順序なく筆の行くがままに、最もう一ツ我が夏の記憶こころを茲こゝに語らしめよ。

山の手の深い堀井戸の水を浴びようとかいうので、夏は水道の水なまぬるの生温かこきを啣かこつ下町の女たち二、三人づれで目黒だいくくやの大黒屋へ遊びに行く途中であった。茂った竹藪こたちや木立こたちの蔭かげなどに古びた小家こいえの続く場末の町の小径こみちを歩いて行く時、自分はふいと半ば枯れかかった杉垣の間から、少しばかり草花を植えた小庭の竹竿に、女の浴衣ゆかたが一枚干し忘れられたように下っているのを目にした。

下町でも特別の土地へ行かねば決して見られぬかたぬき 肩かたぬき 抜ぬき の

模様の浴衣である。それが洗い晒さらされて昔を忍ぶ染そめいろ色は見るか  
げなく剥はげていた。青いものは川端の柳ばかり、蟬の声をも珍し  
がる下町の女の身の末が、汽車でも電車でも出で入いりの不便な貧し  
い場末の町に引込んで秋雨を聴きつつ老い行く心はどんなであろ  
う……何の気なしに思いつくと、自分は今までは唯淋しいとばか  
り見ていた場末の町の心持に、突然人間の零れいらく落、老衰、病死な  
ぞいう特とく種しゆの悲惨を附加えて見ずにはいられなかつた。

下町の女の浴衣をば燈火とうかの光と植木や草花の色の鮮あざやかな間に眺め  
賞すべく、東京の町には縁日えんにちがある。カンテラの油煙ゆえんに籠こめら  
れた縁日の夜の空は堀割に近き町において殊に色美しく見られる。  
自分は毎まい年ねんのようにこの年の夏も東京に居残りはしまいか。

もう八月も十日近くなつた……

明治四十三年八月



## 青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

# 夏の町

## 永井荷風

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>